

前期日程

平成 29 年度入学試験問題（前期日程）

国 語

（教育学部）

—— 解答上の注意事項 ——

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 問題冊子 1 冊と解答紙 2 枚がある。
- 3 問題は 3 問ある。（すべての問題に解答すること。）
- 4 問題の解答は、解答紙の所定の解答欄に記入すること。
- 5 問題冊子は持ち帰ること。

上段の【文章Ⅰ】は、明治四十年七月末から八月末まで、九州北西部を精力的に旅した与謝野寛（鉄幹）・平野萬里・北原白秋・吉井勇・太田正雄（木下李太郎）の五人による紀行文である。旅先から『東京二六新聞』に寄稿され、同年八月七日から九月十日まで、二十九回にわたって、「五人づれ」の署名で掲載された。下段の【文章Ⅱ】は、この旅の後の昭和四年、「五人づれ」の一人である北原白秋が、詩歌の創作について論じた文章である。二つの文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、原文を一部改めたところがある。）（50点）

【文章Ⅰ】五人づれ著「五足の靴」より「雨の日」

雨を冒して佐賀へ向かう、枯れ果てて礎のみ残る城の趾は至る所にある。至る所の城趾は多少の歴史と多少の出来事とを持っているだろう。

一々聞かば面白い事もあるが、どうも大同小異の御家騒動を連想させて困る。御家騒動などは聞きたくない。徳川時代の歴史には型がある、気持のいい奔放な所がない、従って想像を働かせる余地に乏しい。独り天草が異彩を放つくらいなものである。それよりその死んだ城の濠を青々と掩うている蓮ははるかに気持がいい。青い地に白い模様は浮き出してふんと弱い芳い香がする。真直な水色の糸が蓮の葉に降つてささと鳴る。雨は灰色の空と緑の地とを連ね、窺い難き天上の秘密を洩す。蓮の花の快きを通りすぎると町つづきとなる。ひどく古い町である。

ア ノキは歪む、壁は崩れる、腐った家屋には苔が植えてある。幾百年の昔建てた祖先の位牌の前で子は孫を生む、老爺は死ぬ。その鎖をたどると少しづつ違ってしかもどこか似ている顔がずらつと並ぶ。天下に事なし、自然主義が流行ろうが、シヨウチヨウ主義がどうあろうと毫も関わりらん所が面白い。先祖代々至極健全に日を暮らしているのだ。健全を喜ぶ人は田舎へ住むべし、田舎には至る所に健全が鉢合わせをして居る。

【文章Ⅱ】北原白秋「本格の修業」

形を修めるといふことは詩の第一の礼である。詩歌本来の本格の修業は、正しい形式のうちに詩魂を練り、詩句を鍛へ、韻律を整ふることにある。しかも詩の徳は隠約にある。東洋芸術の精神とするところの気韻はこの隠約のうちより生動する。

俳句、短歌のごとき律格の定まった小詩型のなかに、観照の澄徹、表現の精確、進んでは言外の風韻に至るまで、及ぶべきは及び、鍛ふべきは十分に鍛へて、初めて個の新定律、あるいは格外の自由詩作に出づべきは出でていいと思ふ。

しかもまた、俳句短歌の如き小詩型をもって自他共に許す一家の風格を樹つるには、おそらく二十年の歳月を要しよう。かう考へてくると、如何に芸術の道の險難であるか、またはるかに遼遠であるかが思はれる。

基礎はあくまでも堅実であらねばならぬ。詩歌を学ぶ者が、この基礎の修業をゆるがせにしていいといふ懈怠は許さるべきでない。

画ならソビヨウである。かのソビヨウは精確以上に精密であらねばならぬ。その手技の鍛錬を経て初めて丹青の道に遊べるのである。

今の自由詩人たちの多くにはこの基礎の確立が非常に軟弱であるやう

加うるに大方は裸である。大人はわずかに一筋の布を纏う、小供は大きな腹を出してひよつくり立っている。九州一円夏は皆裸だそう。裸の民は太古の民である。東京には新築の家が多い、かつ新木の色をそのままで置くから晴天のようだ。京都へ来ると新築の家の少ないのに、しかも淡い色が塗つてあるから曇天のようだ。田舎の衰えた町は家全体が泥と同化している、夕暮れの色である。町を外れると水国に入る、行く所として川の無い所はない。皆灌溉の用をなすべき緩く流るる平野の小川である。台湾藻と称する河骨に似た藻が所せく繁つて、すつくと咲いた紫の花が小女のように美しい。藻なき所には蜘蛛のような四手網が張られてある。しばらくして筑後川に達した。雨はいよいよ降る。

濁れる河を渡ると佐賀まで鉄道馬車がある。乗る。よく見ると品川と新橋との間を通つてよく脱線したその御古であつた、紋章がそのまま残っている。I生が学校の行き帰りに乗つた馬車である。

思ひきや、筑紫のはてに

品川の馬車を見むとは。

旧知に会う感がした。馬も同じ馬かも知れぬ。ひどく鈍い。二時佐賀着、佐賀の諸君と佐賀城趾を一周し、途に新刊二三種を購う。日は『早稲田文学』を読み、満座哄笑の内に作れる歌。

さみしい、さみしい晩でした、

秋山君がやって来た、

に見受ける。相当の名をなした人々のたまたまに作るころの定型詩を觀ても、いかに格外れの腰折が多いかに驚くのはわたくしばかりではないであらう。その人の詩人としての手腕を品騭するには、さうした定型詩に於ける技巧の如何を見るに越したことはない。

詩はいよいよ散文化した。しかしながらいかなる自由詩といへども、散文の詩であつてはならない。詩でない散文では、いよいよあつてはならない。

詩はいよいよ散文化したとわたくしは言つたが、詩がいよいよ芸苑から失はれつつあることはむしろ深く嘆かれる。何よりも詩の世界そのものが詩魂を失ひつつあるやうに思はれる。詩の保つ語韻とか、個性の風格、香氣等を求むることはいよいよ望まれぬことになるのではなからうか。

この自由詩の時代に、わたくしが本格の修業を説くのは、あるいは気鋭の年少子には笑はれるであらうが、しかしながら、詩は言葉をもつて——日本の詩人は日本の言葉を——その特性について、伝統について、相当知るべきだけはキワめなければなるまい。

わたくしの修業は定型の和歌に発足して自由詩に進んだが、最近ではまた律格の正しい定型詩に還りつつある。もつとも定型詩とはいつても、その内容に従つて一々に異なる新しい自己の形式を創造しつつゆくのである。で、ある意味から言えば、むしろかえつて日本語としての自由詩だと言ひ得るであらう。ただ世に言う自由詩と異なる点は、あくまでも詩の律格を重んじ、隠約を思ひ、放縦をイマシめ、均衡の美を敬ぶのである。

君も知ってるだろう、あの
妙にさびしい……信州の
雑木林に水ぐるま。

いつか話の人生の、
暗い愁に沈んだが、
寂寞、荒涼、そば畑。

四五年前の追懐に、

ふけた、泣いた、あこがれた、

さて夜がふけた、鳴りわたる、

音は法華の題目か、

いな、いな、あれは自然派の、

早稲田太鼓を知らないか。

でかだん、でかだん。

(明治四〇年八月二二日)

注 『早稲田文学』……文芸雑誌の誌名。

哄笑……大声で笑う。

この美しい均衡の世界のなかに、真の芸術の楽しみはこもっているの
である。わたくしはあまりに贅に満ちた雄弁を忌む。

わたくしはまたつましい定型のなかにわたくしの魂を漂蕩させる
ことを好む。短歌の如き定型の小詩型のなかに、胆を練り、神を凝らす
のはこの故である。実際から言っても、自由詩型を行ふよりも、より深い
楽しみがわたくしに来るのである。境涯の美しい遊びがあるのである。

(昭和四年一月稿)

注 隠約……あからさまでないこと。ひそみかくれること。

気韻、風韻……すぐれた趣。風趣。

丹青……絵具を塗る。

品隣……事物の優劣や品質などを論じ定める。

芸苑……芸園。文壇。文学者・芸術家の社会。

漂蕩……ただよう。さまよう。

胆を練り……物事に動じない心を養う。

境涯……この世に生きていく上で置かれている立場。境遇。

問一 傍線部ア、オのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部「それよりその死んだ城の濠を青々と掩うている蓮ははるかに気持がいい」のはなぜか。本文中の語句を使って答えなさい。

問三 【文章Ⅱ】を八十字以内で要約しなさい。

問四 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】には、文章表現上の共通点の一つとして「対比」がみられる。それぞれの対比について八十字以内で具体的に説明しなさい。

問五 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の内容を踏まえ、「創作」についてのあなたの考えを百字以内で記述しなさい。ただし、二重傍線部の中から一か所以上を引用すること。引用の際は、各二重傍線部の全体を引用しても、一部分を引用してもよい。

二 次の記事は、第六十四代天皇、円融天皇の贈答歌を中心に集められた私家集「円融院御集」の冒頭部分である。よく読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文の一部分を改めている。)(30点)

中務なかつかきに、歌えりて参らすべきよし仰おほせせられたりける、書きて参らせける奥に書きたりける
いまさらに老いの袂たもとに春日野の人笑へなる若菜をぞつむ

これを、奥までも御覽ぜでおかせ給ひてけるに、又の年御覽じつけて、いとあはれなりける事をと、おどろかせ給ひて、むまごのみつあきらの少将を御使にてつかはしける

春日野に多くの年はつみつれど老いせぬものは若菜なりけり

御返し

としのつむ若菜はおなじかほなれどけふにはにずやならむとすらん

堀河院におはしまして、閑院大将のすみわたりける所の花の見えければつかはしける、三月の事なり
垣かきごしに見るあだ人の家ざくら花ちるばかり行きて折らばや

御返し、朝光大将

折りにこと思ひやすらん花桜ありしみゆきの春を恋ひつつ

(「円融院御集」による)

注 中務……平安時代を代表する女流歌人。

堀河院……藤原兼通の邸。内裏が焼亡したため、円融天皇は堀河院にうつった。

閑院大将……藤原兼通の男朝光のこと。朝光大将と同じ。

問一 傍線部①について、㉑誰が④誰に対して、㉒どのようなようにするようと言いつけたのか、説明しなさい。

問二 「いまさらに老いの袂に春日野の人笑へなる若菜をぞつむ」の歌について、作者はこの歌にどのような思いを込めたのか、説明しなさい。

問三 傍線部②について、何についておどろいたのか、具体的な人物の名前も入れながらわかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部③の「むまご」とは誰の孫のことか、本文中の言葉を用いて答えなさい。

問五 傍線部④で用いられている和歌の修辞法について、本文に即して具体的に説明しなさい。

問六 傍線部⑤の「ばや」について、文法的に説明しなさい。

問七 「折りにこと思ひやすらん花桜ありしみゆきの春を恋ひつつ」の歌において、「花桜」がどのように思っていると作者は推量しているのか、説明しな
なさい。

三 前漢の宣帝(在位前七四〜前四九)が即位した当時、霍光かくこうという人物が朝廷の実権を握り、彼の一族は隆盛を極めていた。宣帝は初めこの状況を容認していたが、霍光が没してしばらくすると、霍氏一族を反逆者として滅ぼしてしまう。その際、功績のあった人を手厚く賞したが、霍氏排斥をいち早く唱えていた徐福という人物は何の賞も受けなかった。この徐福のためにある人が宣帝に上奏を行った。次の文章はその上奏の内容と、それに対する宣帝の対応を述べたものである。読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省略したところがある。)(20点)

「臣聞客有過主人者、見其竈直突、傍有積薪。客謂主人、

『更あらたメテ為つくり曲突、遠徙其薪。不しからずンバ者且A有ラント火患。』主人嘿然不トシテ応。

俄而家果失火。隣里共救之、幸而得息。於是殺牛置酒、謝

其隣人。灼爛者在於上行、余各以功次坐。而不録言曲突者。

① 人謂主人曰、『鄉使聽客之言、不C費ヤサ牛酒、終亡なケン火患。』今論

功而請賓、曲突徙薪亡恩沢、焦頭爛額為上客耶。』主人

乃寤而請之。今茂陵徐福數上書言、霍氏且E有ラント變、宜シク防ベシト絶之。

鄉使福說得行、則國亡裂土出爵之費、臣亡F逆乱誅滅之敗。

往事既已、而福獨不蒙其功、唯陛下察之、貴D徙薪曲突之

策^ラ、使^メ居^ト焦^ニ髮^ラ灼^ニ爛^ニ之^ニ右^ニ。」上^ニ乃^チ賜^ヒ福^ニ帛^ニ十^ニ疋^ニ、後^ニ以^テ為^レ郎^ト。

(『漢書』による)

注 主人……ある家の主人ということ。

竈……土や石等で作った煮炊きのための設備。

備。

直突……まっすぐな煙突。

嘿然……默然に同じ。

置酒……酒宴を開く。

灼爛……ひどいやけどをする。

上行……上座に同じ。

功次……手柄の大きさの順序。

録……数に入れる。

請賓……客を招く。「請」はここでは招く

の意。後の「請」も同意。

茂陵……地名。

裂土……領土の一部を割き与える。

出爵……爵位を与える。

右……上位ということ。

帛……きぬ。

疋……布地の長さの単位。

郎……官名。皇帝に近侍する。

問一 傍線部Aを口語訳しなさい。

問二 傍線部Bは「曲突を言ふ者を録せず」と読む。この読み方に対応するように返り点を施しなさい。解答は解答欄に抜き出した文で示しなさい。

問三 二重傍線部⑦の「客」と二重傍線部④の「人」が、「主人」に言ったことをそれぞれ簡潔に要約しなさい。

問四 傍線部Cは朝廷での事件に関する記述のどの部分と対応しているか。対応する箇所をそのまま抜き出して示しなさい。(返り点・送り仮名は不要)

問五 傍線部D「徙^レ薪^ニ曲^ニ突^ニ之^ニ策^ニ」とはどのような「策」か。本文全体を踏まえて分かりやすく説明しなさい。

問題訂正

(科目名) 教育学部 前期日程 「国語」

正	誤	訂正箇所
徙 _{セトイフハ} 薪 _ヲ	徙 _{セトイフハ} 薪 _ヲ	7ページ 後ろから4行目